女肩衣

泉鏡花作

一

末法救世の大導師法華經の大行者、當七面山の開祖妙像寺日秀が、此の寺の為に記し殘した未來記の中に××年××月××日・・・・・「擂古木子花咲く」とあり、果せる哉。

味噌を料理すべき役に當てられたのが、女人形立川綾柳が座中で、君吉といつて一番の年少、臺所を働くのを、何と間違へたか、餘所行を引張つて、之がために桃色の手巾を前垂がはりにして紅の襷かけ、絲のやうな黄金に、眞珠の入つた小さな細い指環を嬉しさうに小指に嵌めた手に擂粉木を構へたが、凡て駄々を捏ねるといふ身振。一體四谷鹽町鹽煎餅屋の女だけれども、兩親があつて甘やかして育てたから、ずつと姫様で渡らせられ、炊事の業には馴れないので、擂鉢が前後左右に廻つて、板の間が、がたんがツたん。

「おつと、萬歳樂々々／＼、瓢箪鯰を押へましよ。」と竈の前に立つた姉さん被、中形の浴衣の上へ、黒七子に劍鳩酸五ツ紋の袷羽織、昨夜茶屋場の由良之助を使ふ時、上下がはりに酒落に着るのだ、と言つて、折から樂屋へ來合せた情人筋のを奪つたまゝであるのを、恰もどんよりした今日のお天氣、薄ら寒いのが幸と一着に及んで居る、粂次といふ中年増。

「一寸生捕ります形ぢやあないか、擂鉢と申します者は、お前、そも／＼頼朝こう時分から活きて居るものでございまして、板の間では躍りますものでございますよ。」

「だつてお前さん、仕様がないんだもの。」と君吉は俯向いて笑ひながら、ごし／＼、擂粉木に念を入れると、益々動く。

「感心！　擂鉢が棒のさきに附着いて廻るぢやあないか。然う旨くは、為ようたつて出來ないものだ。あゝ見事なこツた、やゝ、やゝ、此の處練磨の手術。」

「厭よ、笑はしちやあ不可ません、何故だらうね、

あれさ。」
「どツこい、其處だ。」
「不可ませんよ、あれ。」
「妙々、そら刎上つた、おつと轉んだり、やあ／／廻ります／／、とこまかしてよいとことな。」
と足拍子を踏むと、擂鉢は愈々躍る。
「知りませんよ。」　と拗ねたやうに言つて、君吉は眞赤になつた。

粂次は急に眞面目な顔で、
「串戲はよして餘り旨いよ。一寸文福茶釜ツてこともあるしお寺ンだからね、其の擂鉢に魂が入つたんぢやあるまいか。何うも飛び方が一通でない。羽が生えたのかも知れないよ。氣をお着け、お前さんに惚れたのかも知れない、ね、そら、がツたり。」
「厭な、姉さん。」と言ふと、丁ど擂鉢に廻されて君吉は後退りになつた處、吃驚したやうに思はず擂粉木を放して、兩手で縁を押へると、發奮に二ツばかり搖れて、やう／／靜まる。

「東西、恁やういたしましたるが、藝當發端にご

ざりまする。これより太夫あれなる擂粉木を取上げ、トンと呼吸を入れますれば、擂鉢が自然に動く。先づは、つかず離れず兼合の手元にお目を留められて御覧あられませう、あい、來た。」と可い機嫌、持ってた鐵火箸の長いのを揃へて取直すと、竈の縁を叩いたり。

二

「お君さん、打棄つてお置き。男の五ツ紋を引掛けて釜前を勤めるやうな人に取合つてちや、擂鉢に羽が生える位ぢやあ濟みません。狂人に刃物ツてことがあるが、何の事あない粂次に羽織さ。取合つてると怪我をする、恐いよ。」　と向うむきになつて俎板を控へ、大阪漬を拵へようと、傍目も觸らず働いて居たのが、鐵火箸で竈の縁を叩いた粂次の口上に動かされて、今取合ふな、といふ口で、自分が取合ずには居られなくなつた、升代といふのが、

「粂次身に染みて働かないか。だから謂はないこツちやない。汝のやうな藝人は眞面目に所帶を持てさうもない。引摺つてばかり居て、方がへしがつきやしまい、とお斷り申したのだ。」　と不意に妙なことをいひ出した、然も鼻息の荒い男の聲をするから、粂次は呆氣に取られて、君吉と齊しく板前の姉さんを熟と見た。

「すると汝何と謂つた。朝寐も宵張もこんな家業をしてる内は仕方がありません。之が何も藝妓や娼

妓といふのぢやあなし、惰怠風が手足に染込んで、筋が弛んだといふわけぢやあないんですから、明日が日お前さんと一所になつて。」

粂次は君吉と顔を見合せ、黙然になつて怪訝な顔。

「よしんば共稼といふので、私が寄席を辭めないにしても、さうなりや所帶持ですもの、炭にも油にも氣を付けますよ。朝もしら／＼あけから整然と起きて、水を汲んで、釜の下を燃しつけて、米を磨いで、火鉢の掃除をして、鐵瓶を洗つて、水をさして、其をかけて、さあ、其内にご飯がむれると、お香の物を出します。皿小鉢は、晩く歸つたけれども昨夜の内にちやんと洗つてあるといふもんだから、ほらね、ぐいと一ツ拭巾をかけさへすりや可い、直ぐお膳立が出來ると、それから起すんよ、貴郎、一寸、お前さん。」

「おや、升さんが何うかしたよ。」と果しがないから君吉は又擂粉木に取懸る。粂次はらりと、鐵火箸を提げて横に向いて、

「今に泣出すんだらう。」とうつちやつたやうに

いふ。
升さんは委細構はず、
「最う九時ですよ、お前さんと屹といふよ。私が、あゝ、何うしてお前さんの方が餘程惰けさうだツて謂やあがつたぢやあないか、」　と面に色を染むるまで流暢に且つ早口に息も吐かないで、粂次と其の所謂情人筋なる五ツ紋の羽織の主某と、男女の聲を入交ぜに餞舌つたが、一寸句切ると、したゝかに氣をかへて大聲に、鋭く、突込んで、
「やい、粂！」
「何だね、」　と粂次は吃驚する。君吉も思はず手を留める。と升さん愈々眞面目で、
「其に何だ、最う彼是お晝といふのに、澁々起出しやあがつて、井戸端へでも出ることか、漸ツと釜の下を受持つたは可いが、其の形で、ぬうとして、折角働いてる者をつかまへて、突拍子もない擂鉢の口上なんか吐し居る、是見な。消えさうになつてるぢやあないか。」
とかさにかゝつて疊みかけた升さんが、急にがらりと變り、莞爾して背後向に手を伸ばす、と君吉の背中を丁。

「トまづ遊んだものさ、粂次め、理に落ちた顔をして居る。」
「升さん、何、今のは。」
「五ツ紋の言種だよ、お前さんへ、助太刀さ。」
君吉も笑ひ傾き、
「御苦勞様でございました。」と二人ともけろりとする。
「こん畜生。」と粂次は躍起となつて火箸をぱつたり。
「おつと飛道具。」　と升さんは飛上つた、ばた〳〵といふ中へ、本堂の方から靜な跫音。

三

妙像寺の厨の口へ、先づ半面を出だして勝手の様子を窺つたのは、喜多八といふ剽輕な藝名と、其の麗な容貌を以て、立川の一座に呼物の若太夫。

名は其の體を表す、此の婦人は至つて内端で優しい、顔立も打上つて品の可い方、氣質も實味で串戲口一つ肯かないのであるが、おどけ方の人形に不思議の妙を得て、赤坂竝木の北八の如きは、向うへ廻つて彌次で出て居る綾柳さへ、舞臺で思はず微笑むといふ位。

近頃飯倉邊の寄席へ、一座が懸ることになつたが、樂屋の連中は京橋築地あたりに住居があるので、通ふのに足場が惡いからと、都合上此の妙像寺の奥を借りて、女同士煮炊の業も面白半分、わつといふ中に喜多八は一人愼深く窮屈さも構はず師匠の傍に添附つて居廻の世話をする。寺の小僧の十八ばかりになる色の白いのが法華經を誦むのを難有がつて日の中普門品を習ひたいといつたと謂ふので、若有女人設欲求男、喜多八さんは小僧に氣があると、殊の外

評判が善くないのである。

渠は恁る境涯の仲間にも、内端に淑しやかな物越で、

「粂次さん、皆さん御苦勞様でございます。」

「おや、一寸お前さん、まあ此處へ來て御覽なさいよ、大騒ぎだから。」　と粂次は漸く靜つた。

「大抵ぢやあないのね、澄みません。」

「何う仕りまして。」　と威勢よく答へて澄して居る。

「あの少しばかり憚り様ですが。」

「ばあ、お小僧さん、何の御法要でございますか。」　と差出でる升代が、又た厭がるのを知つて人の惡い。

喜多八は苦笑をして、

「何うぞ、其だけはいはないで下さいまし、私は最う。」

「ぱツとして浮名が立つてお惡いなら、畏りまし

た。」　粂公が皮肉なり。

喜多八は聞かぬ振、恁る二人に取合つては叶はじと、

「君いちやん御願ひですよ。」

擂鉢係の可愛いのが、

「何でございます。」と莞爾々々、笑ひながらも、さすがに之は頼母しい。

「あのね、お師匠さんがね、」

「は、」

「一寸何なんですよ、あのう、大變にお腹が空いたんですつて、それですから、あのね。」といひ淀む。お師匠さんのことゝあるので、増も粂も茶には出來ず、眞顔になつて御上使の面を瞻つたので、喜多八は何か打出し惡さう、我が事でゝもあるやうに颯と顔を赧らめながら、

「お膳立の出來ますのが待遠いつてんぢやあゝりませんけれども、何うぞね、おむすびを拵へて下さいましツて。」

「さあ、大變。」

「御覽、だから謂はないこつちやあない。くだらないことを言つて、働くのに身が入らないもんだから、仕様がないね。」　と急に眞面目になつて板前は太く氣を揉む。

粂次は顔を顰めながら、釜の前に蹲んで慌しく、

「おうい、井戸端のウ。」と小聲で引張つて呼ばはると、前の井戸端で米を磨いで居た小房といふのが、雫を切つて兩手をぶらり、勝手口へ顔を出して、

「何。」

粂次は喜多八を仰いで上目づかひ、米さへ未だしらげ果てざる狀を、小房で見せて、ひたと恐縮。

「内證々々、御覽の通の體裁。」

【完】